

## 「被災地内看護職との協働による避難所・仮設住宅・在宅における看護活動（長野班）第五報」

2021年3月20日

報告者：小原真理子 齋藤正子 前田久美子 高田昭彦

### 1. 活動趣旨

テーマ「災害に強くなる知恵と技」キックオフセミナー“長野市の地域特性を知ろう”を開催した。令和元年東日本台風（台風第19号）により千曲川反乱時、支援活動に取り組んだ看護職や施設管理者、県職員、NPOメンバー、そして地元住民を対象とした。グループに分かれ地図を用いて地元の地域特性を知り、今後の自然災害に対する減災能力を高めると共に、同時に交流の場となることを目的とした。方法は地図を基盤とするDIG (Disaster Imagination Game)を用いて、「まちを知る」、「人を知る」、「災害を知る」を目標にシミュレーションにて実施した。

今回の地図は、長野市の①芹田地区 ②長沼地区 ③豊野(上野)地区の3地区を採用した。

### 2. 日時

令和3年3月20日（土・祝） 10時15分～17時30分

### 3. 場所

長野県長野市栗田 清泉女学院大学 4階実習室

### 4. 活動者

学会台風19号P長野班：小原真理子（清泉女学院大学）、齋藤正子（清泉女学院大学）、スタッフ協力者（ファシリテーター）：高田昭彦（富士ゼロックス株式会社）、前田久美子（セラピューティック講師）、長野赤十字病院 看護師（災害看護 CNS）1人

### 5. 協力者

清泉女学院大学看護学生6人、清泉女学院大学教員2名、長野市民病院看護師1名、長野赤十字病院看護師（災害看護 CNS）1人

### 6. 参加者

25人（上記の協力者を含む）

長野市住民、看護職、保健師、行政、大学教員、看護学生

### 7. 報道関係者

信濃毎日新聞 千曲支所記者

## 8. 新型コロナウイルス感染症対策

体調チェック、手指消毒液、アルコールティッシュの配置（各テーブル）、換気（ドアと窓を開放）フェイスシールドの配布、三密を防ぐように呼びかけた。名簿の作成を行い、感染症発生時には、連絡が取れる体制をとった。

## 9. 活動の実際

時 間	内 容
10：00	清泉女学院大学 4階実習室へ集合。 DIGの準備、設営を行う。（5テーブルを設営し、使用物品の準備、長野市の3エリアの地図を準備した。）
11：00	活動者と協力者にて打ち合わせを実施する。
11：30	昼食
12：30	受付開始：フェイスシールドの配布、グループ毎に着席した。
13：00	オリエンテーション DIG（Disaster Imagination Game）を用いて、「まちを知る」、「人を知る」、「災害を知る」ことをシミュレーションにて実施した。 講義・DIGの説明：小原担当
13：50	5グループに分かれ、グループワークを行った。 5グループのエリアのうちわけ Aグループ：豊野（上野）地区、Bグループ：長沼地区（被災地域）、Cグループ：長沼地区、Dグループ：芹田地区（東口キャンパス周辺）、Eグループ：長沼地区 活動者が、ファシリテーターとして各グループを担当した。 ① 自己紹介、役割分担を行った。 ② 基本的な地図を作った。 ③ 地域の「人的・物的資源」を書き込んだ。 ④ 地域特性を知るための意見交換を行った。 ⑤ 想定される被災想定を考えた。 ⑥ 地区住民として対応策について考えた。
13：05	発表 5グループの発表を行った。 A：豊野（上野）→浸水の恐れはない。大学のキャンパスが近いので避難所として使用できる。団地が多い。土砂災害の可能性はある。 B：長沼1→火のやぐらがある。高台避難所があるが、実際は使用できない標高だった。正しい情報を住民に伝える方法が必要である。さまざまな災害による避難所を決めておく。 C：長沼2→地区全体が浸水。泥の堆積により、道路が寸断。道が狭く、消防車やボランティアの車が止められない。火の見やぐらがあっても音を聞いたことがない。防災無線が聞こえにくい。→携帯などを使用していない住民への周知の方法を検討する。水害の伝承が必要である。

	<p>D：芹田→河川の反乱が予測される。ホテルがあり、避難できる。観光客に避難情報が届きにくい。清泉女学院大学を中心として、地域に災害が強くなるワークショップを開催する。</p> <p>E：長沼3→ 水害時に避難所へ行ったが、避難所に入れなかったので避難所の検討が必要。水害だけでなく、この地域には活断層があるため、地震による家屋の損壊や土砂災害の可能性、大火事が被災想定される。電柱等に水害があった高さを表示して「見える化」している。そのことを住民に周知することが課題である。また、絆を作るというコミュニティづくりの難しさを感じている。</p>
16：00	<p>まとめ：小原担当</p> <p>今回のグループワークは、被災をされた方々を含めた地元住民の経験値が活かされていた。「人を知る」ことを踏まえ、今後の地域における「災害に強くなる知恵と技」の一環として減災活動をシリーズ化していく予定である。参加した学生がグループの代表として課題を発表、また「地域を知る」DIG シミュレーションの学習の有効性について振り返っていた。</p> <p>教材の配布：ネックライトの説明</p>
16:30	後片付け
	振り返り
17:30	終了 解散

## 10. 所感

長野地域の新型コロナウイルス感染症（以下：COVID-19）の感染警戒レベルが下がったことから、このキックオフセミナーを企画し、開催されることになった。

長野市内では、現在、災害からの復興のため、まちづくりをどのように行っていくのかを検討している時期である。参加された住民から「地域を知っているようで知らなかった。」、「被災した“さら地”を見るたびに千曲川が憎くなった。」、「場違いだと思ったが、参加して良かった。」等の感想が聞かれた。また、「洪水で避難したがその時でさえ、避難所に入れなかった。コロナ禍では、どうなるのか心配です。」という声からも、洪水や地震の種類によって避難所が違うため、地域の住民がどのように避難するのか、自らの命をどのように守るかなど、行政と連携していくことを考える機会となっていた。

看護学生からは、長野市内に通学のために単身で居住しているが、地域のことを知らなかった。グループワークを通して、地図や情報から避難場所や地域を知ることができたと感想を述べていた。さらに、住民の方がグループワークに参加することで、災害時の状況や地域の実情を知ることができ、具体的に視野が広がっていた。

今回のセミナーにより、「人を知る」機会となったので、さらに「まちを知る」そして「災害を知る」ことで、災害に備えて、住民、行政、大学、病院など地域全体で減災活動に取り組んでいきたい。

## 11. 活動写真および事業写真

(1) セミナーの受付の様子



(2) グループワークの様子



(3) グループワークの様子



教材：長野市主要地図とネックライト等

